黒川紀章設計のカプセルと茶室に関する考察

「壺中」の世界観

CONSIDERATION OF CAPSULE AND TEA ROOM DESIGNED BY KISHO KUROKAWA

Worldview of “Kochuu”

和田 菜穂子^{*1}

Nahoko WADA

This paper aims to clarify the architect's vision from the viewpoint of capsule and tea room designed by Kisho Kurokawa.

The conclusions are as follows:

1. The expression of spoken and written words was equal to the expression of architecture.
2. The fundamental philosophy was formed by the experience of young ages. He learned the Buddhism at junior school and his grandfather gave a great impact to him.
3. Japanese Tradition gave him the inspiration for his new creation.
4. The worldview of “Kochuu” which means to feel universe at minimum space, was unvarying concept for his life.

Keywords: Kisho Kurokawa, Capsule, Tea Room, Kochuu, Hanasuki

黒川紀章, カプセル, 茶室, 壺中, 花数寄

1. はじめに

黒川紀章（以下、黒川とする）が設計し 1972 年に竣工した「中銀カプセルタワービル」（以下、中銀カプセルとする）は世界を代表するメタボリズム建築である。その特徴は取り替え可能とされたカプセルがランダムに積み重なった姿である。黒川はカプセル一つ一つを生物の細胞（セル）とみなし、それを取り替えることによってメタボリズムの概念である新陳代謝がなされると意図していた。カプセルのサイズは男性一人が暮らすために必要な設備を有したわずか 10 平米の狭小空間であった。また黒川はほぼ同時期に自身の別荘「カプセル K」^{※1}を実験住宅として手がけている。家族や友人とともに利用することを想定し、4つのカプセルを組み合わせている。注目すべきはその1つを茶室としている点である。黒川にとって茶室は趣味の一つであった。

メタボリズムの概念は現実離れした構想ゆえ実現したものは数少ない。1970 年代後半にはメタボリズム運動は収束していく。しかし黒川が生涯に渡り、手がけ続けたのが茶室であった。1979 年に初めての本格的数寄屋建築「杏樹荘」と茶室「栗明庵」を、1984 年には自宅マンションにおいて茶室「唯識庵」を設計している。黒川は自著『花数寄』で「数寄屋建築（茶室）は、日本人にとってその文化のルーツを探るのに、きわめて重要な意味を持っている。（中略）建築家にとって数寄屋建築は、日本建築の原点であるといってよいだろう」と述べている。茶室はカプセル同様狭小空間であるが、その

内部には日本人の美意識が凝縮されている。

本稿ではメタボリズムの核となったカプセルと茶室との関連性を言及し、ミニマムな空間に求めた黒川の建築美学を明らかにすることを目的とする。

2. 既往研究

黒川は作品集のほか著述書も含め 137 冊^{※2}の図書がある。英語や中国語など多言語を含んでいるが、これほど自らを語る建築家は珍しい。黒川は自らを「思想家」と名乗り、『新・共生の思想』（徳間書店、1996 年）等で思想の根幹を著している。また講演会等でも「共生の思想」について弁舌をふるった。しかし最晩年になると政界進出を試み、建築家としての立ち振る舞いとはかけ離れた街頭演説が記憶に残る。語らない建築家がいる反面、語る建築家の代表格であった。

また黒川は建築ジャーナリズムを味方につけ、良好な関係を築いていた。例えば建築雑誌『新建築』の編集長を長年務めていた馬場璋造を例にしてみよう。『新建築』は一流建築家の最新作が紙面を飾るという一種のステータスを持つ建築専門誌であるが、黒川は言わずもがなその常連の一人であった。馬場との関係は彼が編集長を退いた後も続いた。黒川が中心になり梅原猛を代表にして 1980 年に設立した「日本文化デザイン会議」で馬場は 1995 年に開催された福岡会議で議長を務めている。2000 年に開催された「黒川紀章

*1 東京建築アクセスポイント 代表理事・博士(学術)

Representative Director, Access Point: Architecture-Tokyo, Ph.D.

回顧展」では実行委員に名を連ねており、黒川との長年にわたる蜜月関係が読み取れる。

かつて朝日新聞社の記者であった松葉一清は建築評論家の一人である。2000年の「黒川紀章回顧展」の図録に「黒川紀章の7つのコトバ」という論文を寄せている。「黒川紀章は「コトバ」のひとつだと思われている。立て板に水とはこういうことを指すのかと思えるほどさわやかな弁舌が、そう思い込ませているのである。実際メタボリズムをはじめ、彼が惹句の名手であることは周知の事実である。しかし、黒川は建築偏愛者であり、その意味では断じて「コトバ」だけのひとではない。彼はあくまで建築家なのであり、彼のすばらしい惹句は、建築家として発したもののなのである。それならば、「コトバ」は彼の作品や思考を理解する上で、決してじゃまするものではないし、なによりの手がかりとなるはずだ」。黒川がいかに饒舌な語り部であったかが如実に示されている。

そのほか、ケネス・フランプトン、ジェフリー・キブニス、飯島洋一らが作品集『JA 18 黒川紀章』（新建築社、1995年）の冒頭に論考を寄せ、ロンドンの建築家・建築評論家のデニス・シャープは『黒川紀章回顧展図録』（1999年）に寄稿している。

建築史家に関しては少し遡るが『黒川紀章作品集』（1986年、新建築社）で村松貞次郎が「私の黒川紀章論」を、鈴木博之が「図像の離陸」と題した評論を掲載している。村松の論でも「つくったものは、考えたことの10分の1にも満たぬ。だから語らねばならぬ」と彼はいう」と黒川を「語る建築家」として位置付けている。黒川の講演録の小冊子『近代建築のどこが悪いか』を絶賛し、「宝石箱のようなアンソロジーであり、また彼の近代建築を超える誓言集ともなっている」とも記している。

建築史家・評論家の五十嵐太郎は大阪万博に関心をもち、2004年に黒川にインタビューを行ない、雑誌『10 +1（テンプラスワン）』にその記録を掲載している^{注3)}。このようにプロとして言葉を紡ぐ存在の建築ジャーナリスト、建築評論家、建築史家らを掌中に収めていたという点において、策略家であったといえよう。

メタボリズム論に関しては2000年代になると再考の時期となり、2011年にレム・コールハースらが『Project Japan: Metabolism Talks』^{注4)}を上梓し、同年に森美術館で「メタボリズムの未来都市展」が開催され、その代表格である中銀カプセルはもちろんのこと、実現していない「農村都市計画」等のプロポーザルも取り上げられた。黒川のカプセル建築に関しては、日本建築学会大会（関東）学術講演梗概集2006年9月に「黒川紀章のカプセル概念 都市からの再考」と題して東京理科大学の大貫健太郎、川向正人が論じている。2014年には「黒川紀章のメタボリズム思想と中銀カプセルタワービルの現状」と題して東京電機大学の菅井隆史、横手義洋が日本建築学会大会（近畿）学術講演梗概集2014年9月にて発表している。前者は黒川のカプセル建築について、スペースフレームとの組み合わせによって展開していたことに注目し、都市との関連性を言及している。また「ホモ・モーベンス」という黒川概念と絡めてカプセルの理念を論じている。後者は一度もカプセルの交換が行われず老朽化が著しい中銀カプセルの現状と問題点を論じている。

このように黒川紀章に関する研究論文はカプセルやメタボリズムに関連するものが散見されるが、茶室に注目してカプセルと結び付

けたものは本研究が唯一である。黒川に対する新しい着眼点を帯びた新規性のある研究と位置付けられる。

3. 研究方法、研究内容

黒川に関する既往論文は前述したようにメタボリズムやカプセルに関するものがほとんどで、茶室や数寄屋建築に関するものは本人の論考を除き、研究論文は見当たらない。そこで本研究では「語る建築家」と評された黒川が著した書籍や論考^{注5)}をもとに仮説を立て、立証していくことにする。

本研究における筆者の仮説は以下である。「未来志向のカプセル空間は日本の伝統的な茶室空間から影響を受けているのではないか」。まず1969年に黒川が発表した「カプセル宣言」に注目してみたい。次に1973年に自身の別荘内に設けられた「カプセル茶室」に着目する。ミニマムなカプセル空間を茶室に見立てているが、その内部は小堀遠州の伝統的な茶室の写しであった。その後、本格的な数寄屋建築を手がけ、現代茶室の試みへと移行していく。

本研究では茶室を発表する際、掲載誌で述べられた黒川の言説を中心に読み解き、時系列に沿って以下の6つの論点で進めていく。

- 1 黒川にとってのカプセルとは
- 2 カプセル建築の実例
- 3 見立てのカプセル茶室
- 4 数寄屋建築への関心
- 5 言葉やキーワードの重要性
- 6 現代茶室への移行

カプセルという工業製品による単位空間と、日本の伝統文化の象徴である茶室という一見すると性質の異なるものを取り上げるが、本研究の目的はミニマムな空間に黒川が求めた美学や哲学を明らかにすることにある。

4. 黒川紀章にとってのカプセルとは：「カプセル宣言」より

黒川は雑誌『SD 特集：カプセルの概念の拡張』（1969年3月号）で「Oh!サイボーグの掟」と題して、8条からなる「カプセル宣言」を打ち出している。その時点ではカプセル建築はディスコ「スペース・カプセル」以外なかったため（Table1）、紙面の中央に「箱型量産アパートメント計画」^{注6)}の模型写真を配し、そのイメージを伝えている。その条文の冒頭を以下に挙げる。

第1条：カプセルとはサイボーグ・アーキテクチャである。

第2条：カプセルとはホモ・モーベンスー動民のためのすまいである。

第3条：カプセルは多称性社会を指向する。

第4条：カプセルは個人を中心とする新しい家庭像の確立を目指す。

第5条：カプセルはふるさととしてのメタポリスをもつ。

第6条：カプセルは情報社会におけるフィードバック装置であり、場合によっては、情報を拒否する装置である。

第7条：カプセルはプレハブ建築ー工業化建築の究極的な存在である。

第8条：カプセルは全体性を拒否し、大系思想を拒否する。

黒川は目を惹くキーワードを掲げ、それを捕捉する形で言葉を繋げていく論法を取っている。「Oh!サイボーグの掟」と題し、第1条に

「カプセルとはサイボーグ・アーキテクチャである」と掲げている。しかし実際にカプセルを用いた建築が登場し始めると、「サイボーグ」という言葉は消え失せ、新陳代謝を意味する「メタボリズム」という言葉がそれに取って代わる。SD 掲載直後に刊行された自著『ホモ・モーベンス 都市と人間の未来』（中公新書、1969 年）の巻末にも「カプセル宣言」の条文と補足する文章に頁が割かれている。

新しい概念を新しい言葉で紡いでいく黒川のスタイルはこの「カプセル宣言」に表出しているが、本稿では条文全てを論述せず第 2 条に掲げられている「ホモ・モーベンス」に着目する。「ホモ・モーベンス」という言葉は黒川が独創したものではなく、あとがきによれば多田道太郎氏との合作だと述べている^{註7)}。黒川は「動民」を「ホモ・モーベンス」と訳し、未来的な意味を付加した。カプセル宣言の第 2 条では、土地に定着せず自由に動く人々を「ホモ・モーベンス」と呼び、「土地や大邸宅という不動産を、人々は次第に欲求しないようになり、より自由に動ける機会と手段をもつことに、価値観を見出すだろう」^{註8)}と述べている。アメリカで普及しているトレーラー・ハウスを参照し、カプセルを用いた新しい住まいのあり方を説いている。特に週末など余暇を過ごすセカンド・ハウスは移動可能なものを推奨している。

Table1 Capsule Architecture by Kisho Kurokawa

名称	用途	竣工年
スペース・カプセル	ディスコ	1968
タカラ・ビューティリオン	大阪万博パヴィリオン	1970
空中テーマ館 住宅カプセル	大阪万博パヴィリオン	1970
中銀カプセルタワービル	集合住宅	1972
カプセル K	別荘	1973
大阪ソニータワー	ショールーム	1976

5. カプセル建築の実例

(1) 大阪万博のパヴィリオン（1970 年竣工）

カプセル建築が日の目を見るのは 1970 年の大阪万博である。黒川は 3 つのパヴィリオンを手がけ、そのうち「タカラ・ビューティリオン」、「空中テーマ館 住宅カプセル」の 2 つでカプセルを用いた。万博は期間限定の催事であるため、解体を前提としている。「新陳代謝」を意味するメタボリズムは、万博を通じ「増殖・成長・分裂・破壊」の仕組みを広く一般の人に広める契機となった。黒川は万博前の組立作業をメタボリズムの始まりと捉えた。プレファブリケーションの仕組みを取り入れ、工場から出荷し現場で組み立てる建設中の記録を残し、雑誌等で発表した。これはカプセル宣言第 7 条「プレファブ建築」の実例を示したことになる。

ところで黒川が「プレファブ建築」に可能性を見出したのは、万博よりさらに 10 年も遡る。黒川は 1958 年にモスクワで行われた「世界建築学生会議」に参加した後、ソ連のプレファブコンクリート住宅の量産工場や建設現場を視察している。帰国後、持ち帰った資料を元に、初めての著書『プレファブ住宅』（彰国社、1960 年）を出版した。その後、カプセル建築の原型ともいえる「箱型量産アパート計画」を 1962 年に提案。つまり「プレファブ建築」に精通していた黒川にとって組立・解体が可能な仕組みを、カプセルを用いて大阪万博で披露することは願ってもない好機であった。

(2) 「中銀カプセルタワービル」（1972 年竣工）

計 140 のカプセルを 2 つのコアシャフトに取り付けた「中銀カプセル」は、大阪万博を訪れたディベロッパーのオーナーが黒川に依頼して実現した単身者用のセカンド・ハウスである^{註9)}。当初の構想ではカプセルは 25 年に 1 度取り替えられるはずであった。カプセル 1 ユニットの大きさはトレーラーで運搬可能な 10 平米 (2.5 メートル x 4 メートル) とし、取り外して海や山へ移動させるという「ホモ・モーベンス」の構想が下敷きになっている。内部は単身者が暮らすために必要なユニットバスやベッドを有し、机や冷蔵庫などはビルトイン方式で壁に収納されている。ただし黒川は内部空間にもこだわりを持ち、終電を逃したサラリーマンが寝るための単なる質素な最小限空間では終わらせなかった。高価なオーディオセットなどを装備し、一人時間を楽しむための趣味の空間というコンセプトを提示した。閉ざされたカプセルの中で音楽鑑賞したり、ベッドに横たわりながらリラックスしたり、仕事に没頭したり、誰にも邪魔されない「個人の自由」が尊重された。

(3) 「カプセル K」（1973 年竣工）

日常から離れた場所で情報を遮断し、自由時間を楽しむのが別荘である。黒川は家族や友人とともに過ごすための別荘「カプセル K」を中銀カプセルとほぼ同時期に軽井沢に設計した。カプセル宣言第 4 条の「個人を中心とする新しい家庭像の確立」を示すための実験住宅の位置付けである。カプセルを 4 つ用い、2 つを寝室、1 つをキッチン、もう 1 つを茶室としてコア部分に取り付けた。それと同時に第 2 条の「ホモ・モーベンス」を提示することが黒川には必要であった。宣言では「カプセルは建築の土地からの解放であり、動く建築の時代の到来を告げるものである」と説いていたからである。『新建築』1972 年 6 月号では、LC-30X「試作レジャーカプセル」、MC-18X「試作ムービングコア」などいずれも移動を前提にしたカプセルを紹介しているが実現に至っていない。実際に建設した自身の別荘「カプセル K」では中銀カプセルと同規格の BC-25 カプセルを用い、まるで銀座から軽井沢に移動してきたかのようにみせている。疑似的に彼の理想のライフスタイル、つまりカプセルとともに移動する暮らし「ホモ・モーベンス」を提示していたのだ。

6. 見立てのカプセル茶室

次に黒川が「カプセル K」でカプセルの 1 つを茶室としたことに注目したい。実験住宅としてカプセルの 1 つに遊び心を持たせたかったことは理解できる。非日常を楽しみ、かつ「個」を重視する趣味の空間。黒川は音楽や映画など多くの趣味を持っていた。しかしなぜ茶室なのだろうか。「カプセル茶室」を作った経緯を探るために、黒川の生い立ちを遡ることにする。

黒川の茶道の趣味は数寄者だった祖父の影響が大きい。祖父の実家の愛知県蟹江江市に中学・高校の 6 年間疎開していた黒川は、茶室を勉強部屋として充てがわれた。それは「容膝庵」と名付けられた 1 畳台目の茶室だった^{註10)}。祖父の実家にはそのほか「無心庵」という松尾宗吾が設計した茶室もあり、そこではよく茶会が催されていたという^{註11)}。黒川は多感な時期、1 畳台目という最小限の空間で一人の時間を過ごしたのである。その経験はその後の彼の空間感覚の根幹となり、単身者用のカプセルを生み出すこととなった。「茶室と

いう空間のスケール感、ディテールはかなり身体や記憶に焼き付いています」と回顧している^{注12)}。その後黒川は東海学園を卒業し、京都大学に進学する。桂離宮ほか伝統的な数寄屋建築に足を運ぶが、彼の心に残ったのは古田織部や小堀遠州らの茶室だった。千利休の虚飾を排した無の美を追求する「わびさび」に対し、弟子の古田織部や小堀遠州はあえて窓を多く設け光を取り入れ、腰張りに唇を用いるなど装飾性や遊びを持たせている。黒川はそれらをのちに「花数寄」と命名し、「花数寄の花とは、異質な要素が組み込まれることによって創造される両義性の美、多義性の美」^{注13)}と述べている。たしかに初めて黒川が手がけた「カプセル茶室」は今までにない発想で異質な組み合わせだった。カプセルの丸窓は外観からみると宇宙船のごとく未来を象徴するデザインである。しかし内部に入ると小堀遠州の茶室を写しており、円窓は伝統的な茶室にもみられるもので、カプセル内部にいることを忘れさせる。

Photo1 Capsule K

Photo2 Capsule Tea Room

7. 数寄屋建築への関心

黒川は1976年の「大阪ソニータワー」を最後にカプセル建築から遠のいていく(Table1)。それと入れ替わるかのように数寄屋建築、特に茶室へ関心を向け、Table2で示すように、1979年の「栗明庵」を筆頭に、1984年には自邸の茶室「唯識庵」を、そしてタイのタマサート大学日本研究所をはじめ、ベルリン日独センター、パリのパシフィックセンターなど諸外国においても茶室を手がけるようになる。掲載雑誌や作品集等^{注14-19)}で調べてみると、それらのほとんどは小堀遠州や古田織部らの茶室の写しであることがわかった。その理由を探るため黒川が初めて手がけた数寄屋建築「杏樹荘・栗明庵」と自身のマンションに設けた茶室「唯識庵」の言説をみていこう。

(1)「利休ねずみ」から「花数寄」へ

言葉を巧みに操る黒川は「利休ねずみ考」と題した論文を『新建築』1977年9月号に掲載し、同年に『グレーの文化』という書籍にまとめている。「利休ねずみ」^{注20)}とは「日本の空間、あるいは日本の文化のもつ両義性、多義性を表現する象徴的な言葉として（自分が）名付けたもの」と述べている。論文には「南方録」^{注21)}にある利休の茶室についての記述があり、次のように分析している。「終にかね（寸法）をはなれ、わざを忘れることによって成立する利休の茶室が終局的には、4畳台目をはるかに超えてより極限的な1畳台目を追求することになるのも、物理的な空間の尺度の狭さを超克して、そこに、非日常で、非感覚的な精神空間を実現しようとするものなのだろう」。この頃の黒川は「利休ねずみ」という言葉に出出しているように、千利休を意識していることがわかる。利休の「極限的な1畳台目」と自分が青少年期に過ごした空間を重ね、そこに「物理的な空間の尺度を超克する精神性」を捉えている。

その後、黒川は自らの手で初めて数寄屋建築に取り組む。1979年に「杏樹荘・栗明庵」と名付けた病院の厚生施設である。「花数寄」という新しい造語が登場するのもそのタイミングである。

黒川の言説を読み解いていくと、自身が数寄屋建築を手がけるようになって初めて自身が目指すところが利休の「待庵」のような衣装を排除した侘びの美意識ではないことに気づく。「侘び」の解釈に疑問を持ち、千利休の弟子たちの試みに関心を移している^{注22)}。そして「花数寄」という言葉を用い、彼の解釈を次のように述べた。「利休の茶の湯、茶室は、あきらかにそれまでの書院を主体とし、唐物名物を中心とする茶の湯からすれば、閑寂であり、簡素であり、求道的であり、抑制的であった。しかし、むしろ花のみあって花を感じることのできなかった書院茶の湯に対立する異質な草庵の精神を持ち込むことによって、より一層花を表現したかったといえないか。花畑に立って花を見るより、夕暮れの道端に咲く一輪の花に心を打たれる気分といつてよいかもしれない。私が侘び数寄に対して花数寄という言葉を選んだのはこのような意味においてである」^{注23)}。黒川は千利休の高弟子の古田織部や小堀遠州らの茶室に「花」を見出し、「私は、燕庵に見られる織部の茶室を利休の茶室より花のあるものと考えたい。(中略)別のいいかたでいえば、伝統の形式にとらわれない自由な創造性がある。(中略)花数寄は、織部によって一歩進

Table2 Tea Rooms by Kisho Kurokawa

建物名・茶室名	竣工年	所在地	備考（参照、引用した茶室など）
カプセルK「カプセル茶室」	1973	長野県軽井沢市	小堀遠州の茶室 ^{注14)}
杏樹荘／茶室「栗明庵」	1979	東京都八王子市	千利休の大阪屋敷の3畳台目、小堀遠州の「転合庵」 ^{注15)}
自邸マンション「唯識庵」	1984	東京都港区	松花堂昭乗の滝本坊茶室「閑雲軒」（小堀遠州の「松翠亭」） ^{注16)}
タマサート大学日本研究所 茶室	1985	タイ・バトンタニ	
サルナート吉運堂 茶室	1986	新潟県白根市	小堀遠州の大徳寺孤蓬庵「忘筌」 ^{注17)}
朝霞荘	1987	東京都新宿区	企業の迎賓館
ベルリン日独センター 茶室	1988	ベルリン	
ジョー・ブライス邸 茶室	1989	ロサンジェルス	
道後館「儒安堂」	1990	愛媛県松山市	古田織部の藪内家「燕庵」 ^{注18)}
パシフィックセンター 茶室	1991	パリ	
A邸「壺中・方寸」	1995頃	神奈川県湯河原	
O邸「瀑看席」	2000	東京都世田谷区	小堀遠州の大徳寺孤蓬庵「忘筌」、村野紹鴎の大徳寺高林庵茶室 ^{注19)}

められたといっけよい」^{註24)}と続けている。初めて手がけた数寄屋建築「杏樹荘・栗明庵」では古田織部の「燕庵」を参照している。例えばPhoto4をみると明らかであるが、茶室内部に窓を多く設け、明るい空間を演出している。黒川は利休の究極的な狭小空間よりも利休の高弟子たちの試みに共感し、異質なものを組み合わせ、数寄屋建築の自由な創造性を自身の数寄屋建築に取り入れたのだ。なお茶室「栗明庵」は1996年に病院敷地内に老人施設を建設する際解体されるが、その後八王子の老舗料亭に移築されている^{註25)}。「解体」「移動」というメタボリズムの展開が数寄屋建築では可能であり、ここで実証されている。

Photo3 Ritsumeian

Photo4 Ritsumeian

ところで「花数寄」という造語の初出は、1980年5月号の『新建築』の論文「数寄屋考―花数寄のこと」であった。「杏樹荘・栗明庵」の建築紹介とともに論文のタイトルとなって登場している。論文によれば「花数寄」のきっかけは愛媛県大洲市にある「臥龍山荘」^{註26)}との出会いと述べられている。1907年に京都の茶室建築家・八木甚兵衛によって設計された、不老院、臥龍院、知止庵、臥龍蓬萊山、庭園で構成されている山荘である。臥龍院は茅葺き屋根の外観で一見すると草庵に見えるが、それに加え民家の要素もあり、黒川が今まで見たことのない力強いインパクトを与えた数寄屋建築だった。「利休ねずみ考」で述べているバロック的な要素もあり、内部の詳細が驚きをもって書かれており、文章からその興奮ぶりが伝わってくる。「欄間の楕円形の納まりといい、そのおおらかさは利休の草庵の侘びを超えて、もう一つの数寄屋の傑作といっけよいのではないかと思う。侘数寄に対して花数寄と呼んでもいいような精神が溢れている」と述べられ、ここで初めて「花数寄」という言葉が登場する。その後黒川は「朝霞荘」(1987年)、「道後館」(1989年)と本格的な数寄屋建築を手がけ、1991年にそれらをまとめた著書『花数寄』(彰国社)を出版している。その冒頭には彼に強いインパクトを与えた「臥龍山荘」を紹介し、「花数寄」とは「侘数寄に対抗して黒川が名付けた数寄屋建築の様式」と明言している。異質な要素が組み込まれることによって創造される両義性の美、多義性の美が花数寄の「花」であり、花数寄の美意識は共生の美意識、つまり「自然と建築との共生、部分と全体の共生、伝統と現代の共生といったものに置き換えてもよい」^{註27)}と述べている。

(2) 思索の場：「唯識庵」の実現

1980年代になると黒川は公共建築にも携わるようになり、1981年福岡県庁舎、1982年埼玉県立近代美術館、1983年国立文楽劇場、1985年つくば万博(電力館、東芝館、日本IBM館など)、1988年名古屋市美術館などを手がけ、建築家としてのメインストリームを着実に歩み始めている。茶室の設計も数は少ないながらもコンスタ

ントに手がけている。

次に1984年自邸マンションに設けた茶室を見てみよう。「唯識庵」と名付けられたこの茶室は、女優若尾文子と再婚後に暮らすために引っ越したマンション屋上のテラス部に日本庭園とともに設けたものである。茶室の命名は中学・高校の6年間、東海学園で学んだ「ともいきの教え」のルーツであるインド仏教の「唯識思想」が元になっている^{註28)}。趣味である茶道を嗜む場として作られたが、黒川は次第にそれ以外の機能や役割を求めるようになった。「記号論と唯識思想の接点を探る作業に夢中になっていることもあって、唯識庵はその思索の場であった」^{註29)}と述べている。夫婦団らんのひとときから離れ、情報を遮断し、一人で茶室空間に籠り、思索に耽っていたことが伺える。それは多感な少年時代に祖父の茶室「容膝庵」で過ごした経験からきているといえる。茶室は本来の機能に加え、日常的な思索の場へと転換していったのだ。つまりカプセル宣言と照らし合わせてみると、第4条「個の確立」、第6条「情報の拒絶」の機能を茶室に担わせているといえる。

「唯識庵」がつくられた頃、黒川は「共生の思想」を世に広めようと腐心していた。「共生」という言葉もやはり黒川がつくった概念で、仏教の「ともいき」と生物学の「共棲」を重ねている^{註30)}。1980年代は建築家としての大進撃もさることながら、思想家としての活動も活発化していく。茶室「唯識庵」で思索した共生の概念は、1987年『共生の思想』(徳間書店)、1991年『共生の思想 増補改定版』(徳間書店)、1996年『新・共生の思想』(徳間書店)の出版という形で示された。

(3) 小堀遠州の写し

「唯識庵」は石清水八幡宮にあった松花堂昭乗の瀧本坊の茶室「閑雲軒」の起こし絵図を元に復元している。さらにさかのぼると「閑雲軒」は焼失した小堀遠州の伏見屋敷の茶室「松翠亭」を模したものであった。黒川は「この茶室の再現までに十七年の歳月を費やしている」^{註31)}と述べている。引き算すると1967年、つまり「カプセルK」の内部に「カプセル茶室」を作った時からという計算になる。「カプセル茶室」もまた小堀遠州の茶室を模しており、その頃からいつしか「閑雲軒」を再現したいという願望を持っていたことになる。なぜ実現までに17年もの年月が必要だったのだろうか。

黒川は堀口捨己監修による『茶室起こし絵図 第4集』(墨水書房)や『伏見屋敷四畳大目茶室図』をじっくり読み解き、使われている材料や寸法を明らかにしようとした。しかしそれには限界があったため、そこでの茶会記録である松屋久好の『松屋会記』で研究を深めた。「寸分違わない材料を手に入れるため、年月を費やした」^{註32)}と述べているが、なぜここまでしてこの茶室にこだわったのだろう。その答えを探るために彼の言説を読み解いていくと、「私が命名した『花数寄』の美意識のシンボルとして復元したかった」^{註33)}と述べている。彼は自分自身の建築概念を示す「言葉」と、それを形で表す「デザイン」を一致させるため手と頭を動かし、建築の実現と言葉の普及に注力していた。「カプセル宣言」で前例があるように、実作よりも先に「言葉」先行するのは彼の常套手段であった。

2002年に放送されたNHKの番組^{註34)}で「なぜ自宅に茶室を復元しようとしたのか」という質問に対し、「世界にない日本建築の原点とは何かを考えた時に、茶室は世界のどこにもない日本オリジナル

のもので日本建築のルーツである。自分の生活の近いところに置き、建築活動の拠点にしたかった」と述べている。黒川にとって茶室はもはや趣味の領域を超え、日本文化のインスピレーションを与える源として、彼の建築活動になくてはならないものとなっていたのだ。

次に茶室「唯識庵」の内部の特徴であるが、遠州が好んだ長四畳台目という平面構成を引用している。点前座が中央にあって、長四畳が一行に配置されているものだ。これによって舞台と客席が明確に区切られた構成になる(Fig.1)。特に点前座に窓が集中しており、舞台性が強調されるのが写真(Photo5)でみてとれるだろう。窓は合計12あり、明るく華やかさを持つことで「花数寄」の意味合いを強めている。黒川はかつての祖父のように客人を招き、本人はもとより夫人の若尾文子が亭主となり点前をすることもあった。その立ち振る舞いの演出を見せるためにこのような空間構成としたのだ³⁵⁾。

Fig.1 Yuishikian Okoshie Photo5 Yuishikian

8. 言葉、キーワードの重要性

黒川にとって自身の建築哲学や思想を言い表す「言葉」は、建築作品と同等に重要であった。Table3 はそれぞれの茶室が竣工した際、建築雑誌に発表した論文等の一覧である³⁶⁾。「花数寄」という言葉は1980年に初めて手がけた数寄屋建築「杏樹荘・栗明庵」の発表時に初出し、「唯識庵」「朝霞荘」と数寄屋建築を手がけるたびに用いている。新たな数寄屋の解釈を「花数寄」という言葉を用いて普及させようと試みているのだ。最終的にこれら論文をまとめた書籍『花数寄』を1991年に彰国社から出版している。

注目すべきは雑誌『建築』(1974年2月号)である。「経腔胞膚相」と題して5つのカテゴリーに分け、黒川紀章建築都市設計事務所の設立以降のプロジェクト34件を紹介する特集が組まれている。1960年「K邸計画案」など実現していない提案も含め、1962年の処女作「西陣労働センター」ほか、1964年「丸亀国民宿舎ほんじま」、1967年「寒河江市庁舎」など白黒写真で計42ページに渡って紹介されている。例えば「森泉郷カプセルK」は「胞」に属し、所員の阿部暢夫の論文「遮断の方法論」とともに紹介されている。この特集号のために黒川事務所内には編集委員会が設けられ、5人の所員がそれぞれを担当している。黒川自身は冒頭に「旅のノート」、あとがきに「念」を執筆している。あとがき「念」によれば「経腔胞膚相」の5文字は「従来、いろいろな言葉で表現してきた概念のキーワードを最も近い漢字で表現するとどうなるかというゲームの中から選ばれたもの」と記されている。1960年代は「メタボリズム」「ホモ・モーペンス」などカタカナで概念を表現することが多かったが、この頃から漢字での表現に変化していることがわかる。「念」を読み進めていくと、最後の文章に筆者は目を見張った。「これらの混沌と

した言葉の刺激が、この15年間私にものを創らせるきっかけとなった。(略)イメージをコミュニケーションするメディアとしてのキーワードになり得るにちがいない」。やはり黒川にとって「言葉」は特別なものであることがわかる。「言葉」は彼のものづくりの原動力となり、さらに人々に想像力を膨らませ、イメージを植え付けさせるメディアとなるのだ。そして最後にこの一文で締めくくっている。「日本の空間の伝統が実体そのものの伝承というよりは、概念の原型の伝承であったように、日常の設計作業の中から一つでも多くの「言葉」をこれからも発見していきたい」。つまり実存しているものよりも概念として後世まで受け継がれるものとして「言葉」の重要性を説いている。「言葉の発見」は彼にとって創造の源となっていたのだ。この文章は1974年のものであるが、彼の姿勢はその後も変わらず貫かれた。建築家として、思想家として、彼は「言葉」を「概念の伝承」のツールとして最重要視していたことを裏付ける一文である。

Table3 List of Articles

建築名	論文タイトルなど	雑誌名	年月
カプセルK ほか	経腔胞膚相/念 ほか	建築	197402
杏樹荘・栗明庵	数寄屋考 花数寄のこと	新建築	198005
杏樹荘・栗明庵	杏樹荘・栗明庵	建築文化	198005
唯識庵	唯識庵	建築文化	198501
唯識庵	花数寄の系譜	住宅特集	1985 冬
タマサート大学	建築紹介	新建築	198509
サルナート吉運堂	建築紹介	新建築	198602
朝霞荘	花数寄	新建築	198804
瀑看席0邸	建築紹介	新建築	200012

9. 現代茶室への移行：「壺中」と「螢籠」

最後の茶室となった「瀑看席」(2000年)は日本画家千住博とのコラボレーションである。コンクリートの箱の4面に彼の滝の絵を設置し、その内側に回廊を巡らせ、さらにその内側に四畳半の茶室を設けている。完成までのプロセスが千住博との1年に渡る往復書簡で綴られ、淡交社の雑誌『なごみ』で1997年1月から連載された。そのやりとりで生じたスケッチを見てみよう。Fig.2を見るとコンクリートの内側に茶室を設け、「非日常の世界＝壺中」と記している。「壺中」とは中国の故事で小さな世界に大きな宇宙を感じることをいう。黒川は「瀑看席」以前に、湯河原に「壺中・方丈」(1995年頃)という名の茶室を設計しており、それ以降「壺中」という言葉を用いるようになっていく³⁷⁾。例えば「壺中」が登場するのは、2002年のNHKのドキュメンタリー番組「美と出会う 黒川紀章 全身これ建築家」でのインタビューである。自邸の茶室「唯識庵」で撮影されたシーンの背後に「壺中」の掛け軸³⁸⁾がかけられている。意図的に床の間に飾り、視聴者の目に映るように演出しているのだ。その翌年2003年に発売されたDVD「北欧建築と日本のフォルム」のタイトルも「壺中」と名付けている。これは監督イエスパー・ワクトマイスターによるドキュメンタリー映像で、建築家らが自作について語るものだ。DVDの冒頭は「瀑看席」が登場し、その後アルヴァ・アアルトの「マイレア邸」、安藤忠雄の「本福寺水御堂」等が続く。黒川は「瀑看席」のほか、

「カプセルハウスK」、「中銀カプセル」、「ソニータワー大阪」を紹介している。黒川は「壺中、それは小さな空間で無限の宇宙を感じる」とその概念を「カプセル茶室」で語る。「壺中」の概念は「瀑看席」の構想段階からあったにも関わらず、それを語るのは「カプセル茶室」の内部であることに筆者は注目する。つまり彼の原点である「カプセル茶室」にも設計当時は意識していなかったが「壺中」の概念が含まれているということを示唆しているのだ。

Fig.2 Sketch Takimino-seki

Fig.3 Sketch Takiminoseki

Photo6 Rokkaen

Photo7 Takiminoseki

もう一度スケッチ Fig.2を見ると、その上下に「入れ子」「螢籠」と書かれている。「螢籠」とは西本願寺所蔵の組立式移動式茶室のことである。黒川は1981年にロンドンのロイヤル・アカデミー・オブ・アーツで開催された「江戸大美術展」の会場構成を行ない、この時に組立式茶室「Rokkaen」(Photo.6)と出会っている。展覧会カタログによれば「螢籠と同じ製造者によって、同じ頃1790年代に作られたもので、折りたたむと38x189x88 cmになる」^{注39)}と記されている。屏風仕立てで簡単に運搬できる組立式茶室は、まさに黒川が推奨していた「ホモ・モーベンス」の考え方の実例であった。海を渡り、ロンドンで展示された組立式茶室は黒川の会場構成によって展示室の中央に配置された。黒川はこのイメージをずっと温めていたのだろう。0邸茶室のプランニングの早い段階で「螢籠」のイメージを千住への往復書簡で伝えている。「千住さんの四面の宇宙の絵に囲まれた「螢籠」の中にもう一つの宇宙が「入れ子」になるという3重の次元の逆転は、この茶室を世界の注目の下に置くことになるかもしれません」^{注40)}とこの構想を推し進めている。さらに黒川は茶室内部からの景観を考慮し、小堀遠州の大徳寺孤篷庵茶室「忘筌」の雪見障子を引用した。これは他の茶室でも用いている手法である。コンクリートの箱の内側四面に千住の春夏秋冬の滝の絵が展示され、その下のガラスの開口部からは自然光が入り込み、外部との接点となる。これは「自然との共生」を意図したものである。平面構成に関してはスケッチの Fig.3に「利休

好みの四畳半」と書かれているが、黒川は当初から正方形にこだわっていた。最終的に行き着いたのが道庫も床もない千利休以前の武野紹鴎が提案し、利休も好んだ「床無四畳半」の平面だった^{注41)}なお黒川がスケッチに日付とサインを入れるようになるのは1997年頃である。そのきっかけは1997年6月にパリのポンピドーセンターで開催された「黒川紀章メタポリズム1960-1975」展だった。展覧会ではスケッチが展示され、その後スケッチ45点がパーマネントコレクションとして買い取られた。それを機にオリジナルスケッチのアーカイブ化を意識し始めるようになったのだ^{注42)}。

考察・まとめ

年代順に黒川のカプセル建築および茶室に関して、彼の言説やキーワードと関連付けて論じてきた。ここで以下の4点から整理し直し、黒川的设计活動や思想活動についてまとめる。一つ目は「造語表現と建築表現」である。自らを思想家と名乗る黒川にとって、言葉造ることも建築を設計することも表現者として同等の価値を有していた。二つ目は「青少年期に形成されたもの」である。中学・高校の6年間、東海学園に通っていた黒川は仏教の教えを習得し、疎開先では茶室を勉強部屋としていた。三つ目は「現代に受け継ぐ日本の伝統」、四つ目は「ミニマムな空間に求めた世界観」である。本研究の結論として以下に詳述する。

(1) 言語表現と建築表現

メタポリズム・グループの一員だった黒川は「カプセル」の有用性に着目し、1969年に「カプセル宣言」を打ち出す。そこでカプセルの可能性を8つの条文で示し、第1条は「サイボーグ」、第2条では「ホモ・モーベンス」等の言葉を用いて人々の気を惹いている。彼にとって「新しい建築の概念」は「新しい造語」によって語られるものであり、建築を構想することも、新しい言葉造ること、彼の表現活動には等価であった。彼にとっての建築は造形表現に留まらず、その根底にある思想表現でもあったといつてよい。思想や美意識が詰まって完成した建築を建築雑誌等で発表する際、気を惹くような「新しい造語」が必要であった。松葉一清は「惹句の名手」と揶揄したが、キーワードで新しい建築概念を示していく手法は黒川独自のものといえる。そして松葉が言うように黒川は「コトバ」の人であるため、彼の作品や思考を理解する上で大きな手がかりとなった。その推移を見ていくと、当初は「サイボーグ」「カプセル」などカタカナを用いて近未来なアイディアを表していたが、その後は漢字を組み合わせた日本的な表現へと変化していく。「利休ねずみ」「花数寄」などはいずれも日本文化、特に茶道文化から発想された表現であり、数寄屋建築への関心の移行と時期が重なる。また「共生」など仏教思想からも着想を得て造語が生まれている。

このような新しい概念と造語は建築作品と対になって建築雑誌で発表され、造語は論文のタイトルとなった。もちろん造語の命名者は自分であることを主張するのを忘れない。「言葉」が先行し、デザインが「言葉」を実証するものとして後から作られるのも彼の常套手段であった。そして自分の造語を一般化させようと、次の戦略として書籍化に注力している。その際、名だたる建築評論家や建築史家の評論が添えられた。書籍は英語だけでなく中国語など多言語

に翻訳され、訳された造語とともに彼の思想や建築作品は世界中に広まっていった。書籍数は他の建築家に比べ圧倒的に多い。また若い頃からカリスマ性のあった黒川は、説得力のある独特の語り口で講演会にのぞみ、観客の心を驚嘆みにした。自らの建築思想や建築作品を広めるため、「話し言葉」や「書き言葉」を巧みに操る稀有な存在の表現者であった。

(2) 青少年期に形成されたもの

黒川は「自分の誕生日は釈迦と同じく4月8日である」と筆者ほか所員の前で自慢げに語ったことがある。黒川は中学・高校時代に通った仏教系スクール東海学園で「ともいきの教え」に共感し、思想家として仏教思想を下敷きに独自の理論を展開している。そして自邸の茶室を「唯識庵」と名付け、そこで記号論や唯識論と対峙し、「共生」という新たな造語を生み出した。いずれも東海学園での仏教の学びから展開させていったものだ。

次に彼の人生に多大な影響を与えたものとして、祖父の影響を指摘する。戦時中、名古屋から疎開した祖父の家には茶室があり、祖父の周りにはいつも文化人が出入りしていた。黒川の父は建築家であったが、文化・芸術の素養は数寄者だった祖父のもとで身につけたといえる。自邸の茶室「唯識庵」の完成まで17年もの年月を要したのも、数寄者の祖父の血筋を受け継ぎ、本物への執着からであった。

その祖父の茶室で多感な青少年期を過ごした経験は「単身者向けのカプセルマンション」の発想の規範となった。黒川はたった1畳台目の茶室で6年間過ごし、極限までに削ぎ落とされたミニマムな空間における合理性などを多感な時期に体得した。そしてスケール感だけでなく、空間の持つ精神性も感受性豊かな黒川は享受した。自邸の茶室「唯識庵」を「独りで思索する場」とみなしていたのは青少年期に過ごしたこの経験が下敷きになっている。

(3) 現代に受け継ぐ日本の伝統

1960年代後半からメタボリズム・グループに属し、最少年メンバーであった黒川は「カプセル」に未来の可能性を見出していた。プレファブリケーションに関してはソ連で実例を見聞し、初めての著書『プレファブ住宅』でその有効性を示している。黒川がカプセルに求めた工業化、すなわち材料のプレハブ化・量産化は、茶室に対する取り組みとは真逆である。茶室はある意味芸術品ともいえ、建て主のこだわりや美意識が反映される。こだわりを実現するために数寄屋大工の優れた技術や材料の希少性などを要する。だが接点があるとすれば、中銀カプセルにおいては当時最も高価だといわれた電子計算機やソニーのテレビ、オープンリールのカセットなど憧れの電化製品を備え付けている点である。これを茶室に置き換えると床柱、床框などのこだわりの素材の扱いとみていいだろう。

25年に1度カプセルを取り替えることを想定していた「中銀カプセル」は、20年に1度行われる伊勢神宮の遷宮がアイディアの源といえる。黒川は毎年のように伊勢神宮を訪れ、伊勢神宮こそ「発見の原点」であり「日本文化の根源」と述べている。「伊勢神宮は千二百年の歴史を持つといいますが、実は二十年ごとの遷宮として、二つの敷地を交互に使って建て替えられています。いいかえれば素材（物理的）そのものは、二十年ごとに新しくなっているわ

けで、これを西欧の概念ではオリジナリティではなく、コピーということになります。しかし日本人は伊勢神宮をコピーとは考えません。このことを私は日本人のもつ見えない伝統と呼んでいます」⁴³⁾。つまり受け継がれていくこと自体に重きを置いているのである。黒川はカプセルの交換によって更新していく着想を日本の伝統建築から得ていた。

このように黒川のアイディアの源は常に日本の伝統文化への敬いから生じている。実際に自らが茶室を設計する段になると、歴史的茶室の写しという形でこの世に再び蘇らせている。例えば小堀遠州の「松翠亭」は焼失後「閑雲軒」として復元されるが、さらに黒川によって「唯識庵」として現代に蘇っている。また黒川の初めての数寄屋建築「栗明庵」は施主の意向で解体されることになったが、他者に譲られ場所を移して再建されている。茶室を解体して移築することは珍しくないが、黒川は偶然にも海外で日本の組立式茶室と出会い、茶室の広範な可能性に開眼する。組立式茶室はカプセルで叶わなかった「ホモ・モーベンス」を体現していたからだ。それがのちに実現する現代茶室「瀑看席」への布石となった。その際黒川は「カプセル」ではなく「コンクリートの箱」の中に「螢籠」の入れ子として組み込み、現代美術とのコラボレーションによって新しい形の現代茶室を生み出した。

(4) ミニマムな空間に求めた世界観

「カプセル」と「茶室」。そのミニマムな空間に彼が求めて行き着いた世界観は何か。それは「壺中」という言葉で言い表されている。中国の故事に由来する「壺中」は四方を壁に囲まれた小さな空間のなかで壮大な思想が現出し、無限の宇宙を感じることをいう。黒川は多感な時期に「容膝庵」という1畳台目の空間でその胸中を知る。「利休ねずみ考」で述べたように当初は「物理的な空間の尺度を超克する精神性」と表現していた。その空間体験の再現をカプセルという工業化製品で試みるがカプセル建築が普及することにはなかった。その後伝統的な数寄屋建築を手がけるようになり、最終的に現代茶室「瀑看席」でコンクリートの中に「壺中」の空間を作り出した。禅語「壺中日月長」からとった「壺の中の小さな世界」である。DVD「壺中」でその言葉の概念が語られるのは、黒川が最初に手がけた「カプセル茶室」であった。つまり小さな空間で壮大な宇宙を感じる「壺中」の世界観は「カプセル」でも存在していたことを意図した演出である。その世界観を示すに相応しい「壺中」という言葉に出会うのは晩年であるが、それは彼の建築哲学として以前からあったことを示唆している。

黒川は日本の伝統を引き継ぎながら、どう現代に表現するかを追い求めた建築家である。本研究ではカプセルや茶室を通じ、彼の言説を読み解いた。「言葉」を重視し、概念の伝承を重んじ、それを説き続けた黒川の姿が浮き彫りとなった。

図版出典

Photo1,2: 大橋富雄撮影、提供

Photo3: 『新建築』（1980年5月号）

Photo4: 『別冊新建築 黒川紀章作品集』（新建築、1986）p.87

Photo5: 『別冊新建築 黒川紀章作品集』（新建築、1986）p.121

Photo6: 『The Great Japan Exhibition: Art of the Edo Period 1600-1868』（Royal Academy of Arts London, 1981）p.296

Photo7: 雑誌『なごみ』（淡交社、2000年6月号）p.5

Fig.1:『建築文化』（1985年1月号）p.130

Fig.2:『平成の茶室を創る 黒川紀章 千住博「往復書簡」』（淡交社なごみ1997年1-12月号）p.11

Fig.3: 同上『平成の茶室を創る 黒川紀章 千住博「往復書簡」』p.48

Table1,2,3: 筆者作成

注

- 注1) 出典によっては「森泉郷モデルハウス K」という表記もあるが、本論文ではもっとも多く用いられていた「カプセル K」と表記する。
- 注2) 黒川紀章建築・都市設計事務所公式ホームページより
- 注3) 「万博という問題系 1 都市、万博、メタボリズム--破壊と再生のプログラム--黒川紀章インタビュー（特集 万博の遠近法）」（INAX 出版、2004 年、No.36、pp.64-79）。次号では「1990 年代以降の建築・都市 (13) 仏教とメタボリズム--黒川紀章論」（INAX 出版、2004 年、No.37、pp.37-40）を論じている。また五十嵐は黒川の死後『建築ジャーナル』2007 年 12 月号にて「黒川紀章が大衆に発信し続けた建築家像」という追悼文を寄せている。
- 注4) 建築家のレム・コールハースとキュレーターのハンス＝ウルリッヒ・オブリスト、太田佳代子らが 2005 年から生存するメタボリスト、同僚、弟子、家族らにインタビューを行ない、それらを写真資料とともにまとめたドキュメンタリーブック。日本語版『プロジェクト・ジャパン メタボリズムは語る』は 2012 年に出版。
- 注5) カプセルについては 1969 年に刊行された黒川紀章著『ホモ・モーベンス 都市と人間の未来』（中公新書）に掲載された「カプセル宣言」を読み解いていく。茶室や数寄屋建築については黒川紀章著『花数寄』（彰国社、1991 年）を中心に読み解いていく。黒川の思想に関しては彼の集大成ともいえる『新・共生の思想』（徳間書店、1996 年）を読み解いていく。筆者は 2000 年に黒川紀章建築・都市建築事務所の社長室秘書課に入社し、主に広報やアーカイブ担当として勤務した。入社前に黒川に手渡されたのが『新・共生の思想』であり「僕の著書を隅から隅まで読みなさい。ここに僕の思想が全て入っている」と言われた。
- 注6) 1962 年に提案したデザインコンセプト。箱型のコンクリートユニット数種類を量産し、その組み合わせによって、公団型の集合住宅をつくるという実験的な工法の研究。箱型コンクリートユニットの増設による成長も可能なメタボリズムとリサイクルの建築。
- 注7) 都市論をめぐるディスカッションの際、多田が人間のパターンを、寓民・遊民・動民という三つの型にわけたらどうかと提案したことから、黒川は「動民」という言葉に着目した。「動民」とは「みずからの欲する価値・目的を求めて積極的に動こうとする人間」と定義している。
- 注8) 黒川紀章『ホモ・モーベンス』（中公新書、1969 年）p.150-151
- 注9) 「万博という問題系 1 都市、万博、メタボリズム--破壊と再生のプログラム--黒川紀章インタビュー」『10+1 特集：万博の遠近法』（INAX 出版、2004 年）p.68
- 注10) 「江戸中期のものと思われる珍しいもの」と記されている（別冊新建築『黒川紀章作品集』（新建築社、1986）p.215
- 注11) 「祖父の印象は毎日家にいて茶会を開いたり、庭の手入れをしたりしている粹人という印象があります」（別冊新建築『黒川紀章作品集』（新建築社、1986）p.215
- 注12) 別冊新建築『黒川紀章作品集』（新建築社、1986）p.215
- 注13) 黒川紀章『花数寄』（彰国社、1991 年）p.4
- 注14) The Japan Architect 18「黒川紀章 1988-1995」（新建築社、1995）p.228
- 注15) 前掲『花数寄』p.64
- 注16) 前掲『花数寄』p.87
- 注17) 前掲『黒川紀章作品集』p.108
- 注18) 『学芸和風建築叢書 現代茶室の試み』（学芸出版社、1993 年）p.89
- 注19) 『平成の茶室を創る 黒川紀章 千住博「往復書簡」』（淡交社なごみ1997年1-12月号）p.49
- 注20) 「利休ねずみ考」『芸術新潮』（1979 年 6 月号）墨染布子色を利休ねず

みと呼ばれる色彩で、江戸後期になると粹花色として流行するようになった。それは「矛盾するいくつかの要素を衝突させて、相殺することによって得られる共存的連続の状態、あるいは非感覚的状态」と定義している。

- 注21) 利休の弟子の南宗寺集雲庵主・南坊宗啓が口伝秘事を伝えた茶書
- 注22) 黒川は「茶の始祖と言われる珠光、紹鴎から千利休へと、侘茶こそ茶の道の真髄といわれてきている以上、「わび」が日本の伝統的な美意識であることは否定できない。しかし問題なのはその解釈である」と述べている。前掲『花数寄』p.4
- 注23) 前掲『花数寄』p.59
- 注24) 前掲『花数寄』p.60
- 注25) 「杏樹荘・栗明庵」が建設された八王子市にある永生病院の現理事長安藤氏に筆者が行なったインタビュー調査(2020 年 3 月 26 日)より判明。「杏樹荘」は現存するが「栗明庵」は平成 8 年に病院敷地内に老人施設を増築する際、八王子市の老舗料亭へ寄贈した。移築し再建されたが、その後解体され、現在の所在は不明である。
- 注26) 2016 年に国の重要文化財となる。黒川が最初に訪れたのは 15 年前と述べていることから 1976 年頃と推測される。前掲『花数寄』p.7
- 注27) 前掲『花数寄』p.7
- 注28) 東海学園時代に恩師の椎尾弁匡より「ともいき仏教」の教えを受け、そのルーツであるインド仏教の「唯識思想」に関心を持った。
- 注29) 前掲『花数寄』p.91-92
- 注30) 黒川は京都大学に進学し、「大学 2 年生の頃から本格的に唯識思想の研究に入った。(略) 以来四十年近く「共生の思想」を私なりに発展させることに力を注ぎ込んできたのである」(前掲『新・共生の思想』p.23)「共生」という言葉を公に用い始めたのは『共生の時代』（講談社、1981 年）の執筆に取り組み始めた 1979 年だと明記している。その翌年行われた「横浜デザイン会議 1980」で初代議長を務め、テーマを「共生の時代」とし、それ以降国内外で「共生」をテーマにした講演会を頻繁に行うようになった。
- 注31) 前掲『新・共生の思想』p.203
- 注32) 前掲『新・共生の思想』p.20
- 注33) 前掲『新・共生の思想』p.20
- 注34) NHK 教育テレビドキュメンタリー「黒川紀章 美と出会う「全身これ建築家」より（2002 年 8 月 31 日放送）
- 注35) 「唯識庵」『建築文化』（1985 年 1 月号）より
なお現在の茶室は所有者が変わり「喜十郎庵」と名が変わっている。(2020 年 10 月 2 日、伊藤文子インタビューより)
- 注36) Table2 の一覧にまとめた「壺中・方寸」など個人所有で雑誌未発表の茶室の存在は黒川紀章建築・都市設計事務所の社歴書から引用。筆者は元所員の茂木愛子にインタビューを試みた。彼女はほぼ全ての茶室を担当しているが、「黒川先生はコンセプト重視で数寄屋建築のディテールは施工者に委ねるところが大きかった」と述べている。(2019 年 8 月 8 日、黒川建築都市設計事務所にてヒアリング)
- 注37) 『花数寄』（1991 年）や『新・共生の思想』（1996 年）では「壺中」という言葉は見当たらない。
- 注38) 博報堂取締役社長であった近藤道生からいただいた書であるが、近藤は茶人でもあり、空中庭園にある唯識庵の主という意味で、黒川の雅号を「唯識庵空中」と名付けている。『平成の茶室を創る 黒川紀章 千住博「往復書簡」』p.12
- 注39) 『The Great Japan Exhibition: Art of the Edo Period 1600-1868』（Royal Academy of Arts London, 1981）p.296
- 注40) 前掲『平成の茶室を創る 黒川紀章 千住博「往復書簡」』p.13
- 注41) 前掲『平成の茶室を創る 黒川紀章 千住博「往復書簡」』p.48
- 注42) 筆者が黒川事務所に勤務していた 2000-2001 年はオリジナルドローイングにサインを入れるものとそうでないものがあった。そうでないものに関しては、裏側にアーカイブ担当者が鉛筆書きで日付を記し、プロジェクトごとにフォルダーに収納していた。
- 注43) 前掲『平成の茶室を創る 黒川紀章 千住博「往復書簡」』p.16

CONSIDERATION OF CAPSULE AND TEA ROOM DESIGNED BY KISHO KUROKAWA

Worldview of “Kochuu”

Nahoko WADA *1

*1 Representative Director, Access Point: Architecture-Tokyo, Ph.D.

“Nakagin Capsule Tower Building” established in 1972 is a world well-known architecture as a symbol of Metabolism architecture designed by Kisho Kurokawa. The architect regards capsule as living cell which have to be replaced every 25 years in order to realize the recycle system of Metabolism architecture, but never exchanged. “Nakagin Capsule Tower Building” is apartment house for single man. Total 140 capsules are attached to the core shaft. At the same time, he designed his summer cottage “Capsule K” in Karuizawa consisted by 4 capsules as an experimental house. One of them is a tea room, because tea ceremony is his hobby. However, the metabolism movement came to be ended in the late 1970’s, he has continued to design tea room since he built traditional Sukiya Architecture “Kyoju-so” and tea house “Ritsumei-an” in 1979.

Kurokawa put the new word “Hana-Suki” for the concept of new Sukiya architecture. Then, he built his own tea room “Yuishiki-an” in 1984 which named from the philosophy of Buddhism. Finally, his last tea room “Takiminoseki” was completed in 2000 collaborate with Japanese painter Hiroshi Senju which is into a concrete box.

The author researched his capsule architecture, tea rooms and his texts to clarify his view of capsule and tea room and concluded the following fourpoints:

1. The expression of spoken and written words by Kisho Kurokawa are equal to the expression of architecture. He often created new words for showing his new concept of architecture and published over 100 books and had lectures. It was necessary for him to spread his new philosophy.
2. The fundamental philosophy of the architect was formed by the experience of young ages in Kanie city of Aichi prefecture during the World War II. He learned the Buddhism at junior and high school. For example, not only the name of his tea room “Yuishiki-an” but his main philosophy “Kyosei” is also inspired from Buddhism. He spent his young ages at tea room “Yoshitsu-an” in Kanie. His grandfather was “Sukisha” which is cultural person and Sukiya collector. His grandfather gave a great impact to young Kurokawa and he got the aesthetic eyes at small tea room of traditional Sukiya architecture. It led to the concept of Capsule architecture to spend at the minimum space alone.
3. Japanese tradition gave him the inspiration for his new creation. Especially, tea room was regarded as the symbol of Japanese original culture. The concept of Japanese tradition was translated by Kurokawa and got reborn as contemporary architecture.
4. He prefer to use the word “Kochuu” for the minimum space in his late years around 2000. He designed “Takiminoseki” into the concrete box in 2000 which was similar to Capsule architecture. Although the material was different, the concept was the same as tea room at “Capsule K”. For him, the worldview of “Kochuu” which means to feel universe at minimum space, is important to express his concept. He realized the world view of “Kochuu” was unvarying concept and has continued from the beginning of his carrier since “Capsule K” was completed in 1973.

(2020年6月5日原稿受理, 2020年12月14日採用決定)